

巨匠パレンボイムがイスラエルとアラブの和平のために中東の若手音楽家を集めて創り上げたオーケストラの企画段階から、パレスチナ自治区ラマラでのコンサート実現までを追いかけたドキュメンタリーと、そのラマラでのコンサート・ライブを収録した2枚組DVD!

「ラマラ・コンサート」

(ワーナーミュージック・ジャパン 2006年)

「互いを知らなければ何も始まらない」というダニエル・パレンボイムの言葉から始まるこのDVDは、彼が親友であるエドワード・サイドと共に設立したウェスト＝イースタン・ディヴァン管弦楽団による演奏会をパレスチナ自治区・ラマラで行うまでの軌跡を追ったドキュメンタリーです。同楽団を構成するのは、アラブ諸国とイスラエル出身の若手演奏家。国交もなく、「イスラエル人は人間じゃないと思っていた」アラブ側の奏者とイスラエルの奏者が一つの音楽を作っていくという、傍から見れば相当に無謀な取り組みです。

本編では、リハ風景のみならず、団員へのインタビューや団員同士が議論を戦わせる場面も多く収められており、当事者として生きる普通の若者たちが何を考えているのか(あるいは考えさせられるような教育を受けてきたのか)を垣間見るという意味でも、貴重な映像となっています。また、パレンボイムがウルフ賞授賞式でイスラエルの占領政策に問題を提起したスピーチの場面で、拍手もせずに相手を見据えて反論するスポーツ文化相は、まさに危険を察知したハリネズミそのもの。「急所を蹴られたイスラエル」の様子は、報道ではなかなか見ることができません。

そして何より、ラマラで演奏することを提案された時の団員の反応と実際にラマラ入りした時のイスラエル人奏者の表情は、まさに中東問題の縮図とも言える様相。そのような中で演奏されたベートーヴェンの交響曲第5番は、絶妙な選曲と言えます。単一のモチーフ(有名な、冒頭のダダダダ)を徹底的に積み上げて作られ、誰が聞いてもうなずけるほどに「苦悩から歓喜へ至る」構成をもつこの曲の前では、もはや国籍も宗教も意味を持たず、そこにあるのは純粋な音楽の力だけ。この演奏会を作り上げる過程を通して変わっていった奏者の様子と相まって、「音楽には、暴力を伴わずに人を変える力がある」というサイドの言葉の正しさが伝わります。政治とは全くかけ離れた、人類にとって普遍的な営みとしての音楽の力は、もっともと見直されるべきだと思います。「団員全ての出身国で演奏したい」というパレンボイムの夢が叶うことを願わずにはいられません。

若井俊宏(わかい・としひろ / アマチュアピアノ弾き / ATJ)

過去のニュースはこちらからご覧いただけます。
<http://www.apla.jp/archives/publications-cat/ptop>

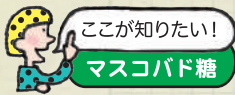
人から人へ
P to P NEWS
 people

MASCOBADO 30th.

2017.6 vol.15

特定非営利活動法人 APLA/あぷら(株)オルター・トレード・ジャパン(ATJ)
 〒169-0072東京都新宿区大久保 2-4-15 サンライズ新宿3F
 TEL:03-5273-8160 FAX:03-5273-8667 E-mail:info@apla.jp

人から人へ



マスコバド糖は ブラウンシュガー?

なんとなくナチュラルな印象のブラウンシュガー、実は単なる「茶色い砂糖」の総称です。精製の過程の違いではありません。たとえばブラウンシュガーに分類される三温糖は、砂糖の精製の過程で最初にできる純度の高い砂糖(一般的な白砂糖)をとった後の糖液からできます。つまり三温糖の茶色は、精製過程で加熱されて糖がカラメル化したものであり後から付いたものです。一方でマスコバド糖は精製をしていない、サトウキビの素材のままの色・成分を残した砂糖です。同じブラウンシュガーでも精製方法や味の特徴が大きく異なるのです。

マスコバド糖はサトウキビの搾り汁を煮詰めて乾燥させて作る黒糖です。「黒糖」と聞くと、独特の香り、強いコクのある砂糖を連想しがちですが、マスコバド糖は、日本の黒糖よりもマイルドで、「あれ、黒糖らしくないね」と言われることもあります。すーっと舌になじんで消えていく、丸い味わい。精製していないので、



2017年3月、ネグロスにて。サトウキビを手で収穫、皆でトラックまで運びます。

フィリピン・ネグロス島の豊かな自然の恵みを受けて、蓄えられた糖蜜やミネラル分がそのまま残っているのが特徴です。お菓子づくりはもちろん、コーヒーや紅茶にとても合いますよ。

後藤翠(ごとう・みどり / ATJ)

★砂糖について、もっと詳しく知りたい方はこちらどうぞ
 →<http://altertrade.jp/mascobado/basics>



パパア先住民族の子どもたちは小さな頃から刃物の扱いに慣れ親しんでいます。それは彼らの暮らしの基盤が狩猟採集にあるからでしょう。子どもは親と一緒に森に入り、パンと呼ばれる大鉋一本で食べものを採ったり、道具を作ることを学びます。大人たちは、小さな子どもが刃物を使っているても「危ない!」と注意したりしません。体の軽い子どもはナイフを口にくわえて高い木にするする登り、実を採るのが得意です。小学生になったばかりのタマラちゃん、サトウキビを包丁で一生懸命削っているけれど、それは食べるため?それとも遊び道具でも作るうとしているのかな?

津留歴史子(つるみ・あきこ / ATJ)

産地の暮らしを垣間見る
 1枚の写真から



パラン
Palan

パパア

特集

マスコバド糖民衆交易に 取り組んで 30 周年



鉄釜から立ち昇る蒸気

マスコバド糖 民衆交易の始まり

1985年、フィリピンのNGOから「ネグロス島の飢餓に苦しむ子どもたちを助けてほしい」という緊急救援の要請が届きました。サトウキビ農園労働者たちのデモに軍が発砲する、病院には栄養失調の子どもたちが溢れているという状況でした。1986年、日本ネグロス・キャンペーン委員会（JCNC）が設立され、「ネグロスの子どもたちに生きる力を！」を合言葉にキャンペーンが始まりました。

フィリピンの砂糖生産量の6割を生産するネグロス島では、国際的な砂糖価格の暴落の影響を受けてサトウキビ農園が次々と閉鎖され、失業した農園労働者の子どもたちが食べものを買えないという理由から深刻な飢餓に陥っていました。JCNCは、1年間の緊急援助の後、ネグロスの人びとと協働する経済活動を考案しました。そのひとつがマスコバド糖を輸入して日本で販売する事業でした。本当に困難な状況にある人びとの具体的な力となることを目指した経済活動（＝民衆交易）の始まりです。

始まったばかりの頃は 問題がたくさん

マスコバド糖の製造は、大きなお釜に屋根をかけただけのような壁のない小さな自前の製糖工場からスタートしました。1992年には小規模な製糖工場が建てられましたが、大きな鉄釜にサトウキビ汁を入れ、直火でクツクツ煮込んでいたので、立ち昇る蒸気のために工場を密閉

できず、工場内に迷い込んだ虫が入ってくるのを防ぐため天井に布を張り、虫取り器を設置していました。販売当初は、日本の消費者から

「〇〇が入っていた」「砂が入っていた」「針金が入っていた」というような異物クレームが相次ぎました。現在はステンレス製の閉鎖釜を使用し、スチームで加熱できるようになったので、虫が入り込むこともなく加熱ムラもなくなりました。異物問題にも真摯に取り組み、工場の衛生環境や品質管理で国際的にも認められるほどになりました。「現在の品質は日本の消費者のおかげです」と工場長のスティーブさんは話します。輸出販売を担うオルター・トレード社（ATC）は、マスコバド糖をフェアトレード商品としてヨーロッパや韓国に輸出を伸ばしており、EUへの出荷の条件として有機認定・フェア



ステンレス製の閉鎖釜

トレード認定の取得にも取り組んでいます。

自分たちのためのサトウキビ 生産から地域づくりへ

そのマスコバド糖用のサトウキビの生産地のひとつであるダマ農園をご紹介します。生産者協会のダニエル委員長はネグロス中部出身で、地主が経営するダマ農園に労働者として入りました。地主に賃上げを要求するため、1997年に自分たちでダマ農園労働者組合を組織化して地主に交渉を始めると、地主からの嫌がらせを受けるようになりました。こうした嫌がらせにも屈せず組合は暴力ではなく法律に基づいた闘争に徹しました。

そして2003年、農地改革省は、ようやくダマ農園の元サトウキビ農園労働者29人に78ヘクタールの土地への土地所

有裁定証書（CLOA）を発行しました。それは農地の耕作権を保証するものです。「サトウキビの刈り取り、トラックへの積み込み作業は相変わらずきついけれども、誰にも支配されないで自由に働けるのが嬉しい！収入は働いた分だけ自分のものになります。子どもたちを学校に行かせられるようになりました」と生産者たちの表情は明るくなりました。

ダマの生産者たちは、最初は作付け資金がなく、メンバーそれぞれが220ペソ（約500円）を出して、サトウキビ栽培を続けました。その後ATCから作付け資金を調達できるようになり、出荷も始まりました。2006年には生産者たちの頑張りでも有機認定も取得しています。サトウキビの他に米づくりを始め、メンバーの分は自給できるようになりました。野菜づくり、放し飼いの養鶏、セラピアの養殖、食品加工なども始め、サトウキビだけに依存しない作物の多様化や有畜複合農業を目指した取り組みが進んでいます。



稲の脱穀作業の様子（ダマ農園）

民衆交易 30 年を経て

飢餓の子どもを抱えたネグロスの人びとが援助金を受けるだけでなく、自立につながる具体的なこと、つまりネグロス民衆の利益を生み出す経済活動を、日本の消費者と共に創ろうと始まった民衆交易。フィリピンの生産者と日本の消費者がつながり、力を出し合って実現してきました。かつては地主のもとで低賃金労働に喘いでいた元サトウキビ農園労働者たちは、民衆交易の仲間たちと共に自立した地域づくりへの歩みを進めています。

幕田恵美子（まくた・えみこ/ATC）



最初の自前の製糖工場